

〈書評〉

長田華子著

『バングラデシュの工業化とジェンダー
——日系縫製企業の国際移転』

(御茶の水書房 2014年 313頁 ISBN: 978-4-275-01058-2 7,600円+税)

太田 麻希子



はじめに

本書は2012年にお茶の水女子大学人間文化創成科学研究科に提出された長田華子氏（現・茨城大学人文学部准教授）の博士論文を元にした研究であり、バングラデシュの輸出向縫製産業の成長とそこで働く女性たちに迫ったものである。リーマンショック以降、中核資本主義諸国の経済の落ち込みとともに低価格の衣料品の需要が高まった。デフレ不況下であえぐ日本の世帯へのこれらのファッションの浸透を、安価な賃金で衣類を生産することで支えたのがバングラデシュの女性工場労働者である。

1970年代、経済停滞に陥った先進資本主義諸国は製造業の生産工程を周辺諸国へと移転し始めた。それは周辺における伝統的社会構造と解体、そしてそこへ組み込まれていた女性労働力が賃金労働へと大量動員される過程の始まりであった。本書が取り上げるバングラデシュの経験も、現在も引き続き展開されるこの国際分業のもとで生じたものである。

さて、周知のように、この時期の世界経済の再編を通し周辺の女性が自らの手で稼ぐようになったということには女性の隷属と自立、両面にわたって大きな意味があり、ゆえに多くのフェミニストがこうした現象に向き合ってきた。著者も同様の強い問題意識を持ってバングラデシュの工業化過程と日本から進出した企業、バングラデシュの女性労働者とその世帯の分析を行なっている。以下、内容を一章ずつ紹介していこう。

内容紹介

第1章では本書の課題が、①バングラデシュにおいて輸出向縫製産業が成長した理由と、②金融危機以降に進んだ日系縫製企業による中国からバングラデシュへの国際移転の特徴を明らかにすることにあると述べられる。

第2章では、独立から現在までのマクロ経済政策と女性政策が概観される。バングラデシュは1980年代に世界銀行とIMFの融資受け入れ条件として構造調整政策を実施したが、その際のマクロ経済の安定と経済成長を達成するために導入されたのが「ジェンダーと開発」政策の組み込みであったことが述べられる。

第3章では、1980年代にバングラデシュの工業化政策が輸入代替型から輸出志向のそれへと移行し、多角的繊維協定のもとで先行して輸出志向工業化に成功していた国々が輸出を制限される中、そこから除外されていた独立後のバングラデシュがNIES諸国の移転先として選ばれ、縫製産業成長につながっ

たことが述べられる。また、その皮切りとして韓国企業によるバングラデシュへの技術移転とそこで訓練を受けた120名の女性たちの存在について触れられる。

第4章では、バングラデシュ独立以降の「労働力の女性化」、農村経済の変容に伴う伝統的就業構造の解体と伝統的なジェンダー規範（＝パルダ規範）の揺らぎに焦点が当てられる。1980年代以降、輸出加工区を中心に「労働力の女性化」が進むが、その背景として農業世帯における食料を賄うことができないまでの収入の低下や土地なし層や零細層の拡大を背景とした賃労働への依存の増大が指摘される。女性は農業においても重要な役割を担っていたが、雇用機会の選択には制限があったことが述べられ、結果、はじめてのフォーマルな労働として縫製労働が選択されたと説明される。

第5章では、日本企業のバングラデシュ展開が取り上げられる。すでに進出していた中国からの第二次移転先としてバングラデシュが選択され、中国子会社とバングラデシュ現地資本企業の合弁企業が生産を行なうことになる。現地企業組織は男性生産幹部がライン設計、労働力配置、賃金査定を占めるのに対し、縫製工程と仕上げ工程には女性が配置される。また、労務管理に日本企業や中国工場が介入することもなく、男性生産幹部が査定を行う。このジェンダー非対称な組織構造のもとでは「大半の女性の技能や経験が正当に評価されることはなく、低賃金労働力として消費されてしまう」と批判的に分析される。

第6章はウォーラーステインの商品連鎖論に基づいて低価格のショートパンツの生産を事例に、バングラデシュ女性労働者の配置と熟練度、賃金査定と世帯／世帯保持について考察している。熟練度や継続勤務年数と賃金査定が矛盾する状況が描かれ、理由として日本企業の労務管理体制の未整備と現地企業組織への依存が挙げられる。また、その世帯／世帯保持状況においては、工員の本人世帯、本人生家、夫生家など複数の世帯で収入が機能する実態などが明らかにされる。そこでは、血縁者と同居することにより生家に対し月給の大半を送金している工員や、両親には送金しないが夫の生家には給与の一部を渡す工員の事例などが取り上げられている。しかし、一方では「伝統的ジェンダー規範に抵触」するはざまにある存在として、熟練工員2名が取り上げられる。家族から切り離された状態で友人たちと生活する女性、家事を母親に任せ夫と別居しながら働く女性の事例が挙げられ、これが今後のバングラデシュの女性像を占ううえで重要であることが指摘される。

第7章ではバングラデシュの現地企業組織に対する中国子会社からの技術移転を取り上げる。ここでは人から人への、「体化された技術」の移転に着目し、日本本社と中国工場間の第一次技術移転と中国工場からバングラデシュ企業組織への第二次技術移転を比較している。中国では日本での3年の研修生制度や日本からの組織的な技術者派遣により高度な技術移転が本格的に展開され、労働者の技術も向上、かつてのようなユニフォームのみならず、スラックスやスーツまで手掛けるようになった。対して第二次技術移転は様々な面で不十分であり、組織のジェンダーヒエラルキーや言語の問題のため、問題が生じていることが述べられる。特に中国工場から派遣された女性技術者の持つ優れた技術は、直接女性労働者には伝達されず、ジェンダー非対称ゆえにバングラデシュ男性に伝わってしまう。こうした状況を改善し、バングラデシュ女性労働者が派遣された中国人女性技術者に内在化された技術情報を獲得するために、ジェンダー非対称な現地企業組織に対する日本企業の主体的取り組みや、中国人女性技術者への人事や賃金査定も含めた権限付与と待遇改善が提言される。

第8章は最終章としてこれまでの要約が記されるとともに、女性労働者を取り巻く「光」と「影」に焦点が当てられる。また、バングラデシュ政府が掲げるジェンダー平等のビジョンに日系企業がどのよ

うに貢献できるかが考察され、NGOなどとの連携を含め日系企業の現地組織への積極関与とジェンダー非対称性の改革などが提言される。

おわりに

フェミニスト分析として見た本書の特色は、多国籍企業内における技術移転と現地の女性の技能向上に着目していることであろう。個々の女性工員とその世帯状況、そして中国の女性技術者に関する記述からは、彼女たちの労働と身につけた技能に対する著者の敬意、それゆえの正当ではない査定や技術習得の機会を得られないことへの焦燥が伝わってくるようであった。特にバングラデシュの半熟練工に対して与えられるジェンダー化された非合理的な賃金査定に関する部分から、その後の技術移転について述べた箇所における中国の中卒たたき上げ女性技術者や、中国工場の女性部長や技術者が持つ瞬時の人事査定能力に繋がる流れは読んでいてとても興味深かった。また、女性工員の賃金が夫の生家も含め、複数の世帯にわたって配分され機能している実態の記述も読みごたえがある。

著者は最終章で、「光」に対する「影」の部分として、相応の技術を持っていても熟練として評価されてこなかったこと、夫の生家にまで送金する女性の存在もあること、そして多くが貧困と隣り合わせで生き、使い捨ての労働力として扱われていることを指摘している。もちろん、こうした問題を解決するのは容易なことではないであろう。しかし、著者が述べる、NGOによる男性幹部を対象に含めたジェンダー平等の啓発活動や、女性の登用を積極的に推奨する企業の出現を踏まえると、バングラデシュの女性労働者を取り巻く環境もまた少しずつ変わりつつあるのだろうか。

さて、世界規模での新しい工業化による女性工場労働は、賃金を得ることにより女性自身が都市の現代消費文化や自由を享受するようになる可能性を創出してきた。著者もまた、女性工員たちの一部からその萌芽を読み取っているように見てとれた。また、最終章の終わりの部分では、バングラデシュ女性労働者の中から将来「中小企業の担い手」が生まれる可能性が示唆されており、著者のこの国の女性労働者に対する強い期待が窺えるものであった。未来に向けてバングラデシュの女性たちがどのような経験をしていくのか、今後が知りたくなる結びであった。

(おおた・まきこ／IGS研究協力員)